



Title	モダン都市上海における裸体の発見 : 『上海漫画』 「世界人体之比較」を核として
Author(s)	井上, 薫
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47158
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について〈/a〉をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	井 上 薫
博士の専攻分野の名称	博 士 (言語文化学)
学位記番号	第 20615 号
学位授与年月日	平成 18 年 6 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	モダン都市上海における裸体の発見—『上海漫画』「世界人体之比較」を核として—
論文審査委員	(主査) 教授 北村 卓 (副査) 教授 中 直一 助教授 坂内 千里

論 文 内 容 の 要 旨

アヘン戦争 (1840-1842) 後の南京条約締結 (1842) によって、上海は開港を余儀なくされた。列強進出の足場となった上海に、イギリスが最初の租界を獲得したのは 1845 年のことである。次いで、アメリカ租界、フランス租界が設けられ、1863 年、イギリス・アメリカ両租界が合体して共同 (公共) 租界を形成していた。清朝はやがて崩壊を迎え、王朝体制にも終止符が打たれる。1911 年の辛亥革命を経た翌 12 年、孫文 (1866-1925) を臨時大總統とする中華民国の樹立が宣言されるのであった。

1920 年代以降、貿易と金融を柱に極東のメトロポリスとして当時の東京をしのぐまでに成長した上海は、まぎれもなく西洋受容の最前線を駆けるモダン都市であった。しかしそこはまた同時に、新文化運動 (1915) や五・四運動 (1919) を背景とした「愛国」ナショナリズムのうねりのなかで、「反帝」「抗日」「反封建」「反軍閥」のスローガンが轟く「民族解放」運動の一大拠点でもあったのである。侵され続ける「国際都市」上海は、まさしく「地獄の上に造られた天国」(穆時英『上海的狐歩舞 (一個断片)』、1932 年 11 月) 以外のなにもものでもなかった。

そのアンビバレントな巨大都市上海において、「旧き悪習」から「解放」され、やはり西洋から導入された近代的な印刷・写真技術、出版・広告文化の発展をバックに、メディア化が進められた表象がある。それは画壇においても、にわかに注目を集め始めた被写体であった。本稿が追う裸体である。週刊誌『上海漫画』(1928.4.21-1930.6.7、全 110 期) の連載コラム「世界人体之比較」(全 37 回) は、このように裸体が模索され欲望される渦の中に出現するのだった。

本稿は、この『上海漫画』「世界人体之比較」を核としながら多面的な考察を行うことで、1920~30 年代の上海における裸体発見の一端を浮き彫りにしていこうとするものである。当然のことながら、モダン都市上海という植民地的近代 (colonial modernity) の「時間」や「空間」を少なからず照射するものとなるだろうが、近代日本にとっても「他者」の出来事として傍観できない事態であろう。それどころか、西洋受容と「愛国」ナショナリズムの潮流のなかで、「世界人体之比較」が実践した国際比較による裸体の発見とは、グローバリゼーションとナショナリズムに揺れる今、「我が身」に引きつけて思考されるべき現前性を孕んだ事象にほかならない。本稿は「他者の過去」では済まされない今日の問題群の提起へとつながるのである。

中国漫画をめぐる研究の流れや動向、その深化といったものを概観しておく、中国の漫画史や漫画作品、漫画家

の軌跡については、研究の核として畢克官『中国漫画史話』（山東人民出版社、1982年）や畢克官・黄遠林『中国漫画史』（文化藝術出版社、1986年）、西丁主編『美術辞林・漫画芸術卷』（陝西人民美術出版社、2000年）などが極めて大きな役割を果たしてきた。また、上記2冊の改訂版となる畢克官『中国漫画史話』（百花文芸出版社、2005年）や畢克官・黄遠林編著『中国漫画史』（文化藝術出版社、2006年）の刊行は、ここ数年の中国漫画研究の動向とその注目度の高さを物語るものであろう。同時に、これまで入手困難と思われてきた民国期の漫画雑誌の発掘も精力的に進められており、まとまったものとしては姜亜沙・経莉・陳湛綺編『民国漫画期刊集粹』全10冊（全国図書館文献縮微復制中心、2004年）が挙げられる。程徳培主編『老上海期刊經典』に収められた周立民・王曉東編『漫画生活1934-1935』（上海社会科学院出版社、2004年）、沈建中編『時代漫画 1934-1937』上下巻（同）なども近年の関心の広がりやを反映している。

アジアの漫画研究の枠組みでも、近代中国の漫画雑誌や漫画作品が研究対象として取り上げられており、例えば、Brian Moeran/Lise Skov(eds.) *ConsumAsiaN Book Series* の一冊として刊行された John A. Lent(ed.) *Illustrating Asia : comics, humor magazines, and picture books*, University of Hawai'i Press, 2001 の収録論文 Kuyi Shen, 'Lianhuanhua and Manhua—Picture Books and Comics in Old Shanghai' (pp. 100-120) および Yingjin Zhang, 'The Corporeality of Erotic Imagination : a study of pictorials and cartoons in Republican China' (pp. 121-136) といった成果がある。

本稿がテキストとする『上海漫画』の影印本『上海漫畫』全2冊（上海書店出版社、1996年）もまた、このような漫画研究の深化のなかで達成された公刊であったといえよう。

しかしながら、『上海漫画』誌上に連載されつつも、漫画作品の範疇には入らない写真コラム「世界人体之比較」をメインの研究テーマに据えて、真正面からの考察や詳細な分析を試みた先行研究はついに見出せないまま、本稿は、まさに暗中模索の発露を余儀なくされた。微力ながらも、一試論となることを願う。以下、本稿の構成を簡潔に記しておく。

第一章では、まず近代中国における漫画というメディアの発展を概観し、本稿で取り上げる『上海漫画』の誕生とそれを支えた漫画家たちの軌跡を追っていく。1930年代半ばの上海には漫画雑誌の出版ラッシュが巻き起こったが、それより数年早く、いわば先駆的存在となったのが『上海漫画』である。なかでも連載コラム「世界人体之比較」は、単行本化も企画されるほど、とりわけ好評を博していたのだった。本章では、「愛国」の政治的イデオロギーと——エロ・グロ・ナンセンスとも決して無縁ではない——商業主義の浸透といった当時の社会的状況も踏まえながら、『上海漫画』「世界人体之比較」の外郭をとらえる。

第二章では、最初に「世界人体之比較」が主張した「正しさ」を検証する。同コラムは、ほぼ毎回にわたって世界の女性の裸体写真を数枚掲載し、文字通り比較という方法論をもって、それら裸体の「優劣」や「美醜」を論じる。「猥褻」とも受けとられかねない「世界人体之比較」が、2年間37回にもわたって『上海漫画』に連載され公に流通し得たのはなぜか。「世界人体之比較」が自ら語った「科学的」で「芸術的」な「正当性」を押さえた上で、本章では特にその裸体発見の「科学的」な言説実践に注目し、つぶさに考察していく。そして、「正しい」「世界人体之比較」が——「強大」な国家や「優秀」な民族の表象としてとらえた——裸体に注ぐ多層的なまなざしを解読する。民族主義的な「愛国」ナショナリズムのもとで「被抑圧者」は列強の植民地主義をいかに見つめていたのか。近代日本をめぐって、小森陽一が看破した植民地的無意識という「忘却」のなかで生成される自己植民地化（『思考のフロンティア ポストコロニアル』、岩波書店、2001年）の——こともあろうに、「反帝」や「抗日」のイデオロギーが轟く——半植民地・租界上海への連鎖と、後に続く「新たな」植民地主義の「芽」といったものを「世界人体之比較」からあぶりだしていく。

第三章では、「世界人体之比較」に掲載された写真資料のルーツを掘り下げる。筆者は、写真の照合など独自の調査を通して、「世界人体之比較」に掲載された100枚にも上る女体写真や人体測定図のほとんどが、19世紀末から20世紀初頭のドイツで出版されたカール・ハインリヒ・シュトラッツ（Carl Heinrich Stratz, 1858-1924）の著書より転載されたものであることを突き止めるに至った。シュトラッツのおびただしい著作再版の背景にあったドイツの裸体主義運動（FKK）の影響に着目しながら、その写真資料の転載先となる「世界人体之比較」との包括的な比較考察を行う。このような作業は、第二章で指摘した「世界人体之比較」の植民地主義をめぐる多層的なまなざしを再検証

するものとなるばかりか、近代中国にみる西洋受容の諸相を改めて照らしだすこととなる。また、日本におけるシュトラッツの受容を——「健康」で「健全」な裸体がプロレタリアートの解放に繋がると考えたであろう——高山洋吉（1901-1975）や安田徳太郎（1898-1983）といった代表的な翻訳者から探ることで、より広い見地から「世界人体之比較」をとらえなおす。

第四章では、「世界人体之比較」が自らの裸体発見の「正しさ」の一つに挙げた「芸術的」なまなざしを追う。当時のモダン都市上海において、「芸術的」な裸体とはいかなるものであったのか。「世界人体之比較」出現の直前に繰り広げられていた裸体モデル論争を一例に挙げ、モードとしての裸体という観点から、劉海粟（1896-1994）の「人体模特兒（人体モデル）」（1925）をよみなおしていく。同時代の上海画壇では、裸体はどのように「芸術的」に言説化され、また実際にはどのようにキャンバスに描かれていったのか。裸体画をめぐる同時代の画家や魯迅（1881-1936）らの批判の手がかりとしながら、裸体モデルという「写実」の装置の転回を辿り、近代中国において画家のペン先を支配した——「新たな」エロティシズムをも内包する——「近代美」の一端を明らかにすることで、モダン都市上海における「世界人体之比較」誕生の必然性や連続性に迫る。

終章では、「世界人体之比較」による裸体発見を振り返りつつ、「束縛」と「解放」の挟間で揺れ続ける今日の問題として改めて考える。ドイツ、モダン都市上海、日本において、幾重にも言説を纏わされた裸体は、センシティブで窮屈な生の錯綜を表象しているのだ。本稿は“誰しものが直面し得る”危機感や“今なお繰り返してしまっているかも知れない”といった実感に訴える論考といえよう。

論文審査の結果の要旨

本研究は、1920～30年代、国際都市として繁栄をきわめる一方で西洋受容と抗日、愛国ナショナリズム等の潮流のはざままで複雑に揺れる上海において、裸体がどのように発見されていったのかを、週刊誌『上海漫画』（1928.4.21-1930.6.7、全110期）の連載コラム「世界人体之比較」（全37回）を徹底的に分析することによって明らかにすると同時に、モダン都市上海という植民地近代の時空間の一断面を照射しようとする、きわめて独創性に富む研究である。

第1章では、近代中国における漫画というメディアの発展を概観するとともに、『上海漫画』に関わる多くの漫画家たちの軌跡を丹念に辿り、『上海漫画』が誕生する背景を浮き彫りにしている。

第2章では、「世界人体之比較」における「科学的」言説に注目しつつ、裸体に注がれる多層なまなざしの解説を通して、民族主義的な愛国ナショナリズムのもとで被抑圧者が列強の植民地主義をいかに見つめていたのかを、自己植民地化という観点から説得的に論じている。

第3章では、「世界人体之比較」に掲載された写真のルーツが、19世紀末から20世紀初頭のドイツで出版されたカール・ハインリヒ・シュトラッツ（Carl Heinrich Stratz）の著書より転載されたものであることを独自の探索によって突き止め、さらにこれまで未開拓であった高山洋吉や安田徳太郎の翻訳による日本におけるシュトラッツの受容についても詳しい調査結果を提出している。

第4章では、画壇において裸体はいかに発見されたのかを、裸体モデルをめぐる当時のさまざまな言説を詳細に検討することによって明らかにしつつ、「世界人体之比較」における裸体の問題を広く上海文化界さらには近代中国全体の中に位置づけている。

そして最終章では、「世界人体の比較」による裸体発見を、束縛と解放のはざまで揺れ続ける今日の問題、現在でも誰しものが直面し得る問題としてさらに捉えなおしている。

膨大ともいえる多くの資料に基づいて丁寧に論証しながら、そこにいくつかの新発見があり、さらにアクチュアルな問題も孕み持つという、実に貴重な研究といえる。文献の日本語訳などにおいて若干の不備も認められるが、本論文全体の価値を損なうものではない。

以上のように、本論文は、博士（言語文化学）の学位請求論文としての成果を十分にあげているものと評価できる。